

特集：国際シンポジウム 「日本／朝鮮・中国東北からみた『満洲』の記憶と痕跡 —輻輳する民族・階級・ジェンダー—」開催にあたって

Memories and Traces in “Manchuria” Viewed from Japan/ Korea and Northeast China: Congested Ethnic Groups, Classes and Gender

金 富子
KIM PUJA

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

キーワード

満洲 中国東北 植民地 日本 朝鮮 民族 階級 ジェンダー

Keywords

Manchuria; Northeast China; colonies; Japan; Korea; ethnicity; class; gender

原稿受理日：2020.1.21.

Quadrante, No.22 (2020), pp.7-8.

共同研究の最終年度のまとめとして、2019年12月14日（土）、中国・延辺大学から孫春日先生、韓国・慶北大学校から李東振先生、さらに明治学院大学の渡辺祐子先生、中央大学名誉教授の吉見義明先生を招いて、標題の国際シンポジウムを開催しました。

本科研の正式名称は、科学研究費補助金受給・基盤研究B研究プロジェクト「日本／朝鮮・中国東北からみた『満洲』の記憶と痕跡～輻輳する人種民族・階級・ジェンダー・セクシュアリティ」です。この科研は、東京外国語大学に所属する7人の教員を中心とする共同研究として、本学大学院生やポスドクなどの若い研究者、満蒙開拓記念館のスタッフの参加・協力のもと、2016年から始まりました。すこし振り返ってみます。

そもそもこの共同研究は、2015年に3カ国4大学の学生が「満洲」に関する共同授業を行い、ともに中国東北の長春や延辺朝鮮族自治州を訪ねるスタディツアーを行い、延辺で孫春日先生、李光平先生に出会ったことから始まりました。「満洲」における日本の侵略の傷跡

の深さとともに、朝鮮人集団移民の存在に改めて気づかされたのです。

日本では、「満洲」といえば日本人移民の苦難だけを考えがちな風潮がありますが、これに抗して、この科研では「満洲」を、日本人だけでなく、朝鮮人、中国人、欧米人を含めて民族・人種、階級、ジェンダー・セクシュアリティが複雑に交差し輻輳する場としてとらえ、その視座から「満洲」経験と現在にいたる記憶と痕跡に関して、歴史的・思想的・文化的に検証することをめざしました。

1年目である2016年には、日本人の「満洲」移民の最大の送り出し元である長野県と飯田市歴史研究所、満蒙開拓平和記念館、川路村資料館を訪問し、3人の移民経験者（子孫含む）にインタビューを行いました。次に、同年12月には延辺大学から孫春日先生、ドキュメンタリー写真家である李光平先生を招き、国際シンポジウムを開催しました。これをきっかけに、李光平先生の写真集を日本で刊行するプロジェクトが始まることになりました。

2年目である2017年には、本格的な中国



東北調査を行い、長春、万宝山、ハルビン、そして延辺地域を訪ね、延辺地域では孫春日先生、李光平先生の案内で日本人入植地と朝鮮人入植地の両方をフィールドワークしました。なかでも朝鮮人集団部落に行き、現地で当時を知る移民一世たちにインタビューを実施したことは忘れられない記憶になりました。また2018年1月には中国から「満洲」文学の研究者を招いた国際カンファレンスを開催するとともに、渡辺祐子先生を招いて「満洲」のキリスト教に関するセミナーを開催しました。

3年目である2018年には、再度、飯田市歴史研究所、満蒙開拓平和記念館を訪問し、日本人「満洲」移民を数多く輩出した長野県でのフィールドワークやインタビューを行いました。満蒙開拓平和記念館のスタッフであり本科研のメンバーでもある島崎友美さんの尽力により李光平先生の写真展、そして孫春日先生の講演が行われました。

同年8月には、孫春日先生とともに韓国のソウルを訪れ、李東振先生も合流して聖公会大学の権赫泰先生・趙慶喜先生との連携によりワークショップ「韓中日における『満洲』移民研究の動向と課題～『満洲国』時期を中心に～」を開催するとともに、「満洲」への朝鮮人集団移民を数多く輩出した江原道原州でフィールドワークを行いました。

最終年度である2019年度には、李光平先生の写真集『満洲に渡った朝鮮人たち——写真でたどる記憶と痕跡』（世織書房）を刊行することができました。これを記念して李光平先生を招いて新宿・高麗博物館で写真展を行いました。講演会・連続講座を含めて、10日間で500人が観覧しました。これは本科研の大きな成果だといえます（その写真展で展示した写真をシンポジウム会場の背面に展示しました）。8月末には瀋陽・撫順、大連・旅順をフィールドワークし、撫順炭鉱、平頂山惨案記念館、撫順戦犯管理所、9・18歴史記念館、満鉄跡地、旅順監獄、大連の日本人向け・中国人

向けの旧遊廓跡地など、日本が中国東北、「満洲」を侵略した記憶と痕跡を辿りました。

これ以外にも科研のテーマに関連する専門家をお招きして研究会を開催してきましたが、このシンポジウムでは、共同研究プロジェクトの一環及びプロジェクトの最終年度の事業として、日本帝国主義・植民地主義の支配の場となった「満洲」をメインフィールドとして、そこに移動する朝鮮人、中国人、そして日本人たちの軌跡を追いつつ、ここで輻輳する民族と階級とジェンダーの関係構成とその意味を考えることを通じて、これまでの研究成果の共有と残された課題に取り組みました。この小特集には三つのセッションの各報告とコメントを収録しました。なお、翌日には若手研究者フォーラム「『満洲』における移民・闘争・ジェンダー」を開催しました。

テーマ①「満洲」移民の思想と文化

司会：中野敏男（東京外国語大学名誉教授）
野本京子（東京外国語大学名誉教授）「日本の『満洲』農業移民政策の思想的系譜——前史としての朝鮮移民事業に注目して」

コメント：孫春日（中国・延辺大学）

テーマ②「満洲」の社会と文化

司会：橋本雄一（東京外国語大学）
倉田明子（東京外国語大学）「近代中国東北『間島』地域のキリスト教」
コメント：渡辺祐子（明治学院大学教授）

テーマ③「満洲」におけるセクシュアリティの展開

司会：吉田ゆり子（東京外国語大学）
李東振（韓国・慶北大学校）「民族・地域・セクシュアリティ～『満洲国』の朝鮮人『性売買従事者』を中心に」
コメント：吉見義明（中央大学名誉教授）、金富子（東京外国語大学）